

いわゆる「注釈」を表す従属節について — 「率直に言うが」と「率直に言えば」 —

亀田千里

キーワード：注釈、接続助詞「が」と「ば」、発話行為、伝達行為、文の階層

0 はじめに

次の(1)(2)の下線部は、どちらもいわゆる「注釈」「前置き」と呼ばれる言語形式である。

(1)率直に言うが、今の日本の経済は危うい。

(2)率直に言えば、今の日本の経済は危うい。

本稿では(1)のような「が」による注釈と、(2)のような「ば」による注釈について考察し、一見同じように見える両者が実は異なる性格を持つものであることを明らかにする。

1 問題の所在 — 「が」による注釈、「ば」による注釈

1.1 接続助詞「が」と「ば」

接続助詞「が」と接続助詞「ば」は、一般にまったく異なった性質の接続助詞として捉えられている。例えば森田(1989)では、両者は次のように記述されている。

が：用言や助動詞の終止形について、“それが実際に起こった事柄、もしくは事実、確かだと思われる事柄であるが・・・”と認めたくえで、さらに別の事柄を言い添えるときに用いる複文を作る助詞。

ば：用言および助動詞の仮定形に付いて、どのような前提が生ずれば後件が成り立つか、その前提とする事柄を仮定条件として示すときに用いる。

また「が」が逆接、対比、場面の設定といった用法を持つのに対し「ば」は仮定条件、恒常条件などの用法を持っており（森田(1989)、国立国語研究所(1951)など）、ここでも両者の違いが分かる。

「が」と「ば」の違いは、構文的な振る舞いの違いからも窺える。

南(1974, 1994)は従属節(南は「従属句」と呼ぶ。)を、その内部構造における成分(述語そのものや、その他の各種修飾語など)・要素(述語内部の構成要素)の現れ方の違いによって、分類している。それによると、「ば」による従属節(以下“「ば」節”¹⁾)と「が」による従属節(以下“「が」節”)には、ある成分や要素を節内に含み得るか否かの違いがある。例えば以下の例から分かるように、「ば」節は節内に過去形「た」を含み得ない(4)。また(5)は非文ではないが、副詞「たぶん」は(5)'のように、「ば」節だけでなく、文全体にかかっている。すなわち(5)"のような解釈はできないため、「ば」節が「たぶん」を含み得るとはいえない。

(3)風が吹けば桶屋は儲かる。

(4)*風が吹いたば桶屋は儲かる。

(5)たぶん風が吹けば桶屋は儲かる。

(5)'たぶん [風が吹けば桶屋は儲かる]。

(5)"たぶん [風が吹けば] 桶屋は儲かる。

一方「が」節は以下のように、過去形「た」も副詞「たぶん」も、節内に含むことができる((7)(8))。

(6)風が吹くが桶屋は儲からない。

(7)風が吹いたが桶屋は儲からなかった。

(8)たぶん風が吹くが桶屋は儲からない。

南(1974, 1994)は従属節をA類、B類、C類の3タイプに分類し、それらがそれぞれ文の違う階層、すなわちA類は「描叙段階」、B類は「判断段階」、C類は「表出段階」に現れるものだとしている。そして「ば」節と「が」節に関しては、(3)~(8)のような振る舞いの違いから、「ば」節はB類、「が」節はC類に分類し、両者が文の違う階層に現れるものだとしている。

1.2 「が」注釈、「ば」注釈

しかし、このように基本的に異なるものとされている「ば」節と「が」節が、同じような振る舞いを見せることがある。

(9)はっきり言えば、太郎は不誠実だ。

(10)はっきり言うが、太郎は不誠実だ。

(9)(10)に共通するのは、前件と後件の命題が論理的な関係を持っていない、という点である。

「ば」節を例にとろう。「ば」による複文（以下“「ば」複文”）の場合、一般的には、前件の命題と後件の命題との間に仮定条件や恒常条件といった、いわば論理的な関係が見られる。例えば以下の(11)において、前件の命題(11)aと後件の命題(11)bとの間には、「(11)aが成り立つと仮定すれば(11)bも成り立つ」という論理的な関係が存在する。

(11)はっきり言えば、祖父には私の言葉が聞こえる。

(11)a（私が）はっきり言う。

(11)b 祖父に私の言葉が聞こえる。

ところが次の(12)における前件と後件の関係は、(11)と異なる。すなわち(12)において、前件の命題(12)aと後件の命題(12)bとの間には、(11)で見たような論理的な関係は存在しないのである。

(12)はっきり言えば、太郎は不誠実だ。（=(9)）

(12)a（私が）はっきり言う。

(12)b 太郎が不誠実だ。

このことは「が」による複文（以下“「が」複文”）でも同様である。以下の(13)において、前件の命題(13)aと後件の命題(13)bとの間には、逆接という論理関係が存在する。しかし(14)では、前件の命題(14)aと後件の命題(14)bとの間にそのような論理的な関係はないのである。

(13)はっきり言うが、祖父には私の言葉が聞こえない。

(13)a（私が）はっきり言う。

(13)b 祖父に私の言葉が聞こえない。

(14)はっきり言うが、太郎は不誠実だ。（=(10)）

(14)a（私が）はっきり言う。

(14)b 太郎が不誠実だ。

接続助詞「が」と「ば」のこのような用法については、国研(1951)、横林・下村(1988)など多くの研究でも指摘されている。そしてこれらは、中右(1980)で「命題外の副詞」とされている一連の言語形式にも当てはまるものである。

しかし、このような用法の「が」節と「ば」節の異同に関する先行研究は、管見の限り

見あたらない。

そこで本稿では以上のような用法の「が」節と「ば」節をそれぞれ「が」注釈、「ば」注釈と呼び、その違いについて考察する。(なお本稿では「けれど(も)」を「が」と同様の働きをするものとする。よって本稿で用いる例文には、「が」のかわりに「けれど(も)」を用いているものもある。)

2 「が」注釈と「ば」注釈の違い

2.1 注釈の種類の違い

中右(1980)は副詞²⁾を「命題内の副詞」(命題の一部を形作るもの)と「命題外の副詞」(命題に対する話者の心的態度を表明するもの)とに分け、「命題外の副詞」を更に次の4種類に分類している。

- ① 価値判断の副詞
- ② 真偽判断の副詞
- ③ 発話行為の副詞
- ④ 領域指定の副詞

このうち④については、中右(1980)ではくわしく論じられていない。そこで①②③に目を向けてみると、「が」注釈は①②③のどのタイプにも現れる³⁾。

- (15) お気の毒ですが、信じがたいことだが (価値判断の文副詞)
- (16) 推測になるが、私は思うのだが (真偽判断の文副詞)
- (17) 話は違いますが、おおっぴらには言えないが (発話行為の文副詞)

一方「ば」注釈は、発話行為の文副詞(20)にはなれるものの、価値判断の副詞(18)や真偽判断の副詞(19)にはなることができない。

- (18)*お気の毒(なら)ば、信じがたいこと(なら)ば
- (19)*私は思えば
- (20)はっきり言えば、具体的に言えば

ここから、同じ「命題外の文副詞」であるとはいえ、「ば」注釈は「が」注釈に比べて、使用範囲が限られていることが分かる。

2.2 発話行為を表す「が」注釈と「ば」注釈の違い

2.1において、「ば」節も「が」節も発話行為の文副詞になれることを確認した。では発話行為を表す「が」注釈と「ば」注釈の違いは、どこにあるのだろうか。ここではまず2.1及び2.2.2で両者の違いを表すと思われる言語事実を挙げる。そして2.2.3でその解釈を試みることにする。

2.2.1 後件の違い

まず始めに、「が」注釈と「ば」注釈には、後件に勧誘や命令の形が現れ得るか否かという違いが見られる。

まず、「が」注釈から見ることにしよう。

(21)はっきり言うが、この計画はやめたい。

(22)はっきり言うが、この計画はやめよう。

(23)はっきり言うが、この計画はやめろ。

上記のように、「が」注釈の後件には平叙文(21)ばかりでなく、勧誘(22)や命令(23)も現れる。

一方「ば」注釈の場合は、後件に勧誘や命令の形が現れない。

(24)はっきり言えば、この計画はやめたい。

(25)?*はっきり言えば、この計画はやめよう。

(26)*はっきり言えば、この計画はやめろ。

ちなみに「が」節も「ば」節も、注釈でない場合には、後件に勧誘や命令の文をとることが出来る。

(27)彼が来れば、会議をする。

(28)彼が来れば、会議をしたい。

(29)彼が来れば、会議をしよう。

(30)彼が来れば、会議をしろ。

(31)彼が来るが、会議をする。

(32)彼が来るが、会議をしたい。

(33)彼が来るが、会議をしよう。

(34)彼が来るが、会議をしろ。

よって(21)～(23)と(24)～(26)の違いは、「ば」節と「が」節一般の違いではなく、あくまで「ば」注釈と「が」注釈の違いであることが分かる。

2.2.2 文脈の違い

「が」注釈と「ば」注釈にはまた、次のように、対話の中における振る舞いの違いも見られる。まず(35)をご覧ください。

(35)太郎：あれ、今日はどうして次郎と一緒にじゃないの？

花子：ええとね、手短に言えば、別れちゃったのよ。

(35)では、「ば」注釈が現れている。これを(35)'のように「が」注釈にしてみると、不自然になってしまう。

(35)'*花子：ええとね、手短に言うけど、別れちゃったのよ。

逆に(36)では、「が」注釈が使われている。これを(36)'のように「ば」注釈にすると、不自然になる。

(36)太郎：なんか文句があるなら言ってみろよ。

次郎：じゃあはっきり言うけど、おまえのことなんか始めっから嫌いだったんだ。

(36)'*次郎：じゃあはっきり言えば、おまえのことなんか始めっから嫌いだったんだ。

2.2.3 解釈

では、2.2.1と2.2.2で指摘した「ば」注釈と「が」注釈の振る舞いの違いは、どう解釈できるのだろうか。

これに深く関わると思われるのが、中右(1994)の指摘である。中右(1994)では、命題外副詞を更に次の2種類に分けている⁴⁾。

- ・ Sモダリティ：話し手が発話時点において全体命題（の真偽いずれかの値）に対してとる信任態度（コミットメント）のこと。
- ・ Dモダリティ：話し手が発話時点において構文意味の全体（Sモダリティ+全体命題）に対してとる発話・伝達態度のこと。

そして中右はDモダリティに関して、次のような指摘を行っている。

着目すべきことに、発話態度は典型的には伝達態度でもある。というのも、発話行為は典型的に伝達の場合を想定し、つぎに伝達の場合は少なくとも話し相手の存在を前提

とするからである。しかし発話行為によっては話し相手を必要としない場合もある。

(中略) このように、伝達場面での発話行為は必ずしも伝達行為ではないが、しかし逆に、伝達行為であれば発話行為でもある。(中右(1994)p. 41)

すなわち中右は、発話態度を表すモダリティ(Dモダリティ)に、発話行為だけを表すものと、発話行為と伝達行為の両方を表すものとの2種類があることを示唆しているのである。

中右はこの違いに関して、これ以上言及はしていない。だが、この違いこそが、実はこれまで見てきた「ば」注釈と「が」注釈の差に当てはまるのだと思われるのである。

まず、2.1.1で示した現象を振り返ってみよう。

(37)はっきり言うが、この計画はやめよう。(=(22))

(38)はっきり言うが、この計画はやめろ。(=(23))

(39)?*はっきり言えば、この計画はやめよう。(=(25))

(40)*はっきり言えば、この計画はやめろ。(=(26))

「ば」注釈が後件にとり得なかった勧誘、命令の文というのは、益岡(1991)で「訴え型」とされている文の類型である。

益岡(1991)は演述の型を「演述型」「情意表出型」「訴え型」「疑問型」「感嘆型」の5つに分け、「訴え型」は「対話文」にのみ現われ「非対話文」には現れない、と指摘している。これを踏まえると、訴え型の文と共起できない「ば」注釈は、対話相手の存在を意識しているのではない形式であり、逆に訴え型の文と共起できる「が」注釈は、対話相手の存在を意識した形式であるといえよう。

そしてこのことは、2.2.2で見た現象と照らし合わせると、より明らかになる。

(41) (=(35))

太郎：あれ、今日はどうして次郎と一緒にじゃないの？

花子：ええとね、手短かに言えば、別れちゃったのよ。

(41)?*花子：ええとね、手短かに言うけど、別れちゃったのよ。(=(35)')

(42) (=(36))

太郎：なんか文句があるなら言ってみろよ。

次郎：じゃあはっきり言うけど、おまえのことなんか始めっから嫌いだったんだ。

(42)*次郎：じゃあはっきり言えば、おまえのことなんか始めっから嫌いだったんだ。

(41)における注釈の部分は、後件をどう述べるか、という花子の態度を表明しているにすぎない。よって「ば」注釈では表せ得るものの、「が」注釈は現れない。次の文の違いに関しても、同様のことが言える。すなわち(43)における「ば」注釈は相手に向けられているものではなく、単に後件をどう述べるかという話者の態度を表明しているにすぎない。よって(43)'のように「が」注釈にすると非文になる。

(43)太郎は痩せている。具体的に言えば、身長が180cmで体重が50kgだ。

(43)*太郎は痩せている。具体的に言うが、身長が180cmで体重が50kgだ。

一方(42)における注釈の部分は、後件をどう述べるかという次郎の態度を表わすと同時に、その表明を太郎に対して提示しているものである。よって「が」注釈でしか表せ得ないのである。

2.4 SモダリティとDモダリティ

2.3において、「ば」注釈と「が」注釈とが厳密には異なるものであることが確認できた。だがここで次のような疑問が生じてくる。

- ・Dモダリティに2種類があり、「ば」注釈はそのうちの一方であるのか。
- ・それとも「ば」注釈は、実はSモダリティなのか。

この疑問はすなわち、中右(1994)のいう「相手の存在を意識していない」発話行為と、Sモダリティ（命題に対する話者の判断の表明）との違いへの疑問でもある。

これを確認するために、ここでは中右(1980)(1994)でSモダリティの副詞とされたものと「ば」注釈との共起を試みる。

まず始めに確認しておくが、同じSモダリティにある副詞同士は、共起することができない。

(44)*たぶんきっと彼は合格する。（真偽判断+真偽判断）

(45)*あいにく不幸にして彼は落第した。（価値判断+価値判断）

(46)*もちろん幸いにも彼は合格した。（真偽判断+価値判断）

(47)*幸いにももちろん彼は合格した。（価値判断+真偽判断）

これを踏まえて、Sモダリティの副詞である「あいにく」（価値判断の副詞）、「きっと」「たぶん」（真偽判断の副詞）と、「ば」注釈の共起を見る。その前にまず「が」注釈を見ると、これはSモダリティの副詞と共起し、更にその外側に位置する。よってこの

「が」注釈はDモダリティであると判断できる。

(48)正直に言うが、あいにく今日はお金の持ち合わせがない。

(49)正直に言うが、きっと彼は君を裏切る。

(50)正直に言うが、たぶんこの町は滅びる。

では、「ば」注釈はどうであろうか。

「ば」注釈は、これらの副詞と共起させると、許容度の判断が微妙になる。

(51)?正直に言えば、あいにく今日はお金の持ち合わせがない。

(52)?正直に言えば、きっと彼は君を裏切る。

(53)?正直に言えば、たぶんこの町は滅びる。

今のところ本稿では、先の疑問に対し明確な答えを用意していない。しかし(48)~(50)と(51)~(53)の許容度の差を鑑みるに、おそらくSモダリティとDモダリティは連続したものであり、「ば」注釈はその間に位置するものなのではないだろうか。これはまた、南(1994)のいう「判断段階」と「提出段階」との連続性をも示唆すると思われる。

だが、本稿ではその可能性を指摘するに留めておき、早急な結論付けは避けておくことにする。

3 根本的な問題—なぜこれらが注釈に使われるか?—

数ある接続助詞のうち、注釈を表す節に用い得るのはあまり多くない。「ば」「が」の他には「と」「なら」「たら」「て」のみ(南 1994: 5)。

ではここで、「ば」と「が」がどのように注釈に使われるか、という点について考えてみたい。そのためにもまず「ば」節が注釈になる際の制限を見ておくことにする。

3.1 「ば」注釈の制限(1)

中右(1994)はモダリティを構成する要素概念として、話し手、発話時点(現在時)、心的態度の3つを挙げる。このうち心的態度の概念は必須条件である。3つの要素すべてがそろっているのが典型的なモダリティである。話し手、発話時点の要素が欠けていても、心的態度さえ含んでいれば、周辺的なモダリティ表現の例に含まれるとする。

すなわち、① John moved, ② John agreed, ③ John agrees, ④ I agreed, ⑤ I agree という5つの文のうち、典型的なモダリティ表現は⑤であり、①はモダリティ表現ではない。そして

残りの②、③、④は「心的態度」の要件だけは満たしているのに、周辺的なモダリティ表現と見なせるとしている。

「ば」節の場合、「一人称」「現在」「心的態度」という3要素のどれが欠けてもモダリティにはならない((54)(56)(58))。更に心的態度は遂行動詞に限られ、「残念だ」など命題に対する話し手の感情を表すものは現れない((60))。

一方「が」節の場合は、心的態度さえ含まれていればモダリティに成り得る((55)(57)(59))。更にその心的態度も、遂行動詞に限られない((61))。

(54)率直に言えば、太郎は不誠実だ。

(55)率直に言うが、太郎は不誠実だ。

(56)*さっきも言ったば、太郎は不誠実だ。

(57)さっきも言ったが、太郎は不誠実だ。

(58)*花子も言っていれば、太郎は不誠実だ。

(59)花子も言っているが、太郎は不誠実だ。

(60)*残念(なら)ば、太郎は不誠実だ。

(61)残念だが、太郎は不誠実だ。

すなわち、「ば」節は「が」節に比べ、モダリティになる際の制限が強いのである。

3.2 「ば」注釈の制限(2)

また「ば」注釈は、「後件を「どう」述べるか」という内容のものでなければならない。すなわち「「いつ」述べるか」「「誰に」述べるか」といった内容には成り得ない((62)(64)(66)(68))。一方「が」注釈は、そのようなものにも成り得る((63)(65)(67)(69))。

(62)?もう一度言えば、太郎は不誠実だ。

(63)もう一度言うが、太郎は不誠実だ。

(64)?今日こそはっきり言えば、太郎は不誠実だ。

(65)今日こそはっきり言うが、太郎は不誠実だ。

(66)*いつも言えば、太郎は不誠実だ。

(67)いつも言うが、太郎は不誠実だ。

(68)?君にだけ言えば、太郎は不誠実だ。

(69)君にだけ言うが、太郎は不誠実だ。

更に「が」節は、心的態度を含まない（すなわちもはやモダリティとは呼べない）場合にも、杉戸(1983)(1989)や才田・小松・小出(1984)などの扱ういわゆる「注釈」たりえるのである⁶⁾。

(70)既に多くの人に知られているが、太郎と花子がこの度結婚することになった。

3.3 「ば」節と「が」節が注釈になる理由

このように、「ば」節は注釈に成り得る条件がとても厳しいのに対し、「が」節は広く注釈に成り得る。これを踏まえて、「ば」節と「が」節が注釈になる理由を考えてみる。

まず「ば」であるが、「ば」は基本的には「条件」を表すものだった。条件とは、いつてみれば「場を作る」ものである。ある場を設定し、その場において後件の命題が成り立つのだ、ということを述べようとするものである。その性格が、「ば」が注釈になれることに強く関わっていると思われる。これはその他の条件形式（なら、たら、と）についても同様である⁷⁾。

一方「が」に関してはどうだろうか。接続助詞「が」には逆接、場面提示など様々な用法があるが、それらの連続性を考慮すると、「が」は後件を聞き手に導入するための前段階を提示するものであると考えられる⁸⁾。その性格が、「が」をもって注釈ならしめているのではないかと考えられる。

すなわち「ば」節はその「条件」という性格ゆえに、遂行動詞を含む時にいわばたまたま注釈のような振る舞いをするのではないか。それに対し「が」節はいわゆる「注釈」一般を形作る節なのだといえよう。

4 まとめと残された課題

本稿では、接続助詞「ば」と「が」による注釈について考察した。そして両者は一見同じように見えるけれども、「ば」注釈は話し手の態度（発話行為）を表明しているにすぎないのに対し、「が」注釈は話し手の態度を表明すると同時にそれを相手に対して提示しているのだ、という違いを明らかにした。

残されている問題は、既に触れた部分もあるが、次のようにまとめられる。

(a) 「ば」の「条件」という性格が「ば」を注釈たらしめる、その精密な過程

(b) 「ば」はSモダリティかDモダリティか、その判断

(c) 注釈を表す他の形式について

(a)(b)については、本稿の中でおおまかな考えは提示したものの、更なる精密な分析が必要である。(c)については、副詞との連続性も考慮しつつ、考察する必要があるだろう。

【注】

¹⁾ ただし、この用語は南によるものではない。

²⁾ なお中右のいう「副詞」の中には、語単位のもの（「あいにく」「おそらく」など）ばかりでなく、文単位のもの（「すみませんが」「はっきり言うと」など。いわゆる「文副詞」）も含まれる。

³⁾ (15)(16)(17)の例は、いずれも中右(1980)で挙げられているものである。また(20)の例も同様である。

⁴⁾ ちなみに中右(1980)で分類されている副詞のうち、「価値判断の副詞」と「真偽判断の副詞」はSモダリティに、「発話行為の副詞」はDモダリティに位置づけられている。

⁵⁾ 厳密に言えば「て」形は接続助詞ではない。しかしここでは接続助詞に準ずる形式と考える。

⁶⁾ 杉戸(1983)、才田他(1984)では、「注釈」を次のように定義している。

◇杉戸(1983)

- ・話し手が第一義的には話し相手とみずからの関係を条件として考慮に入れて行う、言語行動の要素についての選択・評価・判断。
- ・明言された言語行動であり、言語行動主体がみずからの言語行動の何らかの側面について行った（書いた）言語行動であるという、メタ言語行動としての性格を持つ。

◇才田他(1984)

- ・自分の言語行動あるいはその要素に言及するもの。
- ・次の4つの性格を持つ。
 - (1)自らの言語行動およびその要素へ言及するというメタリンガルな機能をもっていること。（これが最も基本的な性格）
 - (2)一文内にあつて、構文論的に言えば副詞節となっているもの。
 - (3)注釈するもののまえにあるもの。
 - (4)それ自身が一つのスピーチアクトとしての機能をもっていること。

⁷⁾ 「と」を条件形式とは認めない立場もある（坪本(1993)など）。なお「と」が注釈になる場合については、坪本(1993)が考察を行っている。

⁸⁾ 亀田(1995), (1998予定)。

【参考文献】

- 大賀京子 1992『日本語文副詞の特徴』 筑波大学日本語・日本文化学類1992年度卒業論文
- 加藤陽子 1992『複文の従属度に関する考察－接続節と主節のモダリティを中心にして』 筑波大学地域研究研究科1991年度修士論文
- 亀田千里 1995『接続助詞「が」に関する一考察』 筑波大学文芸・言語研究科1995年度修士論文
- 亀田千里 1998予定「接続助詞「が」の提題用法について」『日本語と日本文学』第26号 筑波大学国語国文学会
- 小出慶一 1984「接続助詞ガの機能について」『アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター紀要』 7: 30-44.
- 国立国語研究所 1951『現代語の助詞・助動詞－用法と実例－』秀英出版
- 国立国語研究所 1991『日本語教育指導参考書19 副詞の意味と用法』
- 才田いずみ・小松紀子・小出慶一 1984「表現としての注釈－その機能と位置づけ－」『日本語教育』52号: 19-31.
- 杉戸清樹 1983「待遇表現としての言語行動－「注釈」という視点－」『日本語学』2-7: 32-42.
- 杉戸清樹 1989「言語行動についてのきまりことば」『日本語学』8-2: 4-14.
- 坪本篤朗 1993「条件と時の連続性－時系列と背景化の諸相－」益岡編(1993)所収: 99-129.
- 中右 実 1980「第4章 文副詞の比較」国広哲弥編『日英語比較講座 第2巻 文法』 157-219. 大修館書店
- 中右 実 1994『認知意味論の原理』 大修館書店
- 益岡隆志 1991『モダリティの文法』 くろしお出版
- 益岡隆志編 1993『日本語の条件表現』 くろしお出版
- 南不二男 1974『現代日本語の構造』 大修館書店
- 南不二男 1994『現代日本語文法の輪郭』 大修館書店
- 森田良行 1989『基礎日本語辞典』 角川書店
- 横林宙世・下村彰子 1988『接続の表現』 荒竹出版